

## 黙示録20章7-15節 「火の池の裁き」

### 1A サタンによる感わし 7-10

1B 諸国の民による包囲 7-9

2B 投げ込まれる悪魔 10

### 2A 大きな白い御座 11-15

1B 数々の書物 11-13

2B 第二の死 14-15

## 本文

黙示録 20 章を開いてください。私たちは前回、20 章の前半を学びました。サタンの支配する世界に対して、王の王、主の主であるキリストが戻って来られて、キリストの御国を地上に打ち立てられたところを読みました。御国が来ますように、という主の祈りがかなえられたところです。そして、終わりの日にある、神を冒瀆する獣の国が滅びました。獣である反キリストと偽預言者は、「19:20 生きてまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。」とあります。そして、キリストと共にすでに天にいた教会は、キリストと共に座に着いており、患難時代に殉教した聖徒たちはよみがえります。これが第一の復活と呼ばれました。よみがえることによって、栄光の姿をもって、神の国をキリストにあって受け継ぐのです。

ところで獣の背後にいる者、獣に自分の力と位と権威を与えた者、竜である悪魔は、底知れぬ所に鎖につながれました。これが、千年間、キリストが世界を治められている神の国において続いている状態です。ですから、この世界において誘惑というものはありません。しかもイエス様は、鉄の杖をもって牧されます。悪を行う者、反抗する者があれば、力をもって制裁を加えるのであり、悪が広がることは一切ありません。

今の時代と比べて見ましょう。今は恵みの時代と良いでしょう。いや、神の恵みはとこしえからとこしえまで続くので、今だけが恵みの時代と言ったら語弊がありますが、けれども、神の恵みもっとも顕著に現れている時代です。イエス様が、「マタ 5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」と言われたように、主が忍耐強く待っておられる時であります。パウロもローマ書で、「2:4 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」と言いました。慈しみによって、人々を悔い改めに導こうとしておられます。

ですから、悪の中にいる者たちを救おうとされているので、悪がそのままにされているかのよう

に見えるのです。しかし、神は決して悪を見逃しておられず、定められた時に裁かれます。それが、キリストが地上に戻って来られる時であり、千年王国では、悪を地上でほとんど見いだすことができないのです。

### 1A サタンによる惑わし 7-10

悪魔が底知れぬ所で鎖でつながれており、悪は完全に抑えられています。けれども、悪がないことを意味していません。思い出していただきたいのですが、千年期の支配において、諸国の王たちがメギドの山、ハルマゲドンに集結して、それから神とキリストに反抗して戦うけれども、世界中の国々の民全てが死に絶えるのではないのです。そうした諸国の民が、王座に着いておられるイエス様のところに集められます。「マタイ 25:31-33 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」そして、右にいる者たち、羊である者たちには、「25:34 世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」と言われます。それは、「25:40 あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」裸の人に着る物あげ、病気や牢にいる人々を訪問しましたが、わたしの兄弟たちとイエス様が言われていますから、患難時代にイエス様を証していた者たち、あるいは肉の兄弟であるユダヤ人です。そういった者たちに良くしてあげた者たちが、御国に入る祝福にあずかると主は定めておられました。

ですから、イエスは、ご自身を主と認めていないにしても、それでも主と認めている人々に寄り添い、獣の国の中で自らの命の危険を冒しても助けていた人々を、御国の中に招いてくださるのです。アハブの時代、アハブの家臣でオバデヤという人が、バアルに身をかがめていなかった主の預言者を匿っていましたが(1列王 18:1-15)、そういう人たちです。

ですから、千年間のキリストの統治において、復活のからだ、栄光のからだを持っている人々ばかりではなく、むしろ、このような今の私たちの肉体の体と同じ体をもって生きている人々もいるということです。そして、これらの人々は子を産んでいきます。栄光の体を持っている私たちは、御使いのようになっていますから、婚姻関係を持っていませんが、彼らは持っているので増えていくのです。そして、イザヤの預言にこのようなものがあります。「65:20 そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命を全うしない老人もいない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。」ものすごい長寿になり、千年間生きることができるようになるのです。アダムが 930 年まで生き、その後もかなり長い年月を生きましたが、千年王国は、それをしのぐことによって、エデンの園のように神が世界を回復されたことを証されます。肉体の中にあっても、千年間生きるような環境が与えられます。しかしながら、それでも今の肉体を持っています。そして、百歳で死んでしまう人も、まれにですがいるのです。死がわずかながら、存在し

ます。つまり、罪を宿す体を持っているということです。

そこで分かることは、これらの人々が罪を犯す可能性が、いまだ十分にあるということなのです。ここが、次に出てくる、千年が終わってから、悪魔が牢から解き放たれるという出来事がある所以になります。

#### 1B 諸国の民による包囲 7-9

<sup>7</sup>しかし、千年が終わると、サタンはその牢から解き放たれ、<sup>8</sup>地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海の砂のようである。

なんと、諸国の民が、これだけ至福に満ちた神の国において、サタンに惑わされ諸国の民が反抗するために集まってきます。海の砂のようになっており、なぜもこう逆らっていくのか、私たちはとても不思議に感じますね。けれども、キリストが鉄の杖による支配をしておられることを思い出してください。罪を犯す機会がないのです。悪魔が鎖につながれています。誘惑がありません。しかし、それで神の民になっているとは限りません。ほぼ完ぺきな環境の中に置かれているクリスチャン家庭の子弟がいるとしますと、そこでこれらの子が、イエス様につながっているかと言えば、必ずしもそうではないと言えますね。

では、どうすれば？と思われると思います。それが、「選択」なんです。愛による関わりを持つためには、自由意志によって主を選び取る必要があります。子羊なるイエス様を、他のものではなく自分の主とする必要があります。エデンの園にある、善悪の知識の木がそうでした。なぜ、そこに神があえて置かれたのか？と言いますと、「神の命令を置いた」と言い換えたらよいでしょう。神に拠り頼むことには、その命じられたことに従うことです。しかも、その選択肢がすばらしく見えるものであればあるほど、神を愛していることの真価が試されます。

そして、いのちの木のそばに、善悪の知識の木があったことも大事です。園の中央にあるのですが、神の園の中心は命です。私たちは神の永遠の命につながられています。しかし、そこにはいつも、善悪の知識の木と隣り合わせです。悪魔のように、高ぶる選択肢はいつも目の前にあります。むしろ、主との親しい交わりを知る時は、ダビデがそうであったように、「敵前で、杯があふれる(詩篇 23)」というものがあるでしょう。それが、最後の惑わしの背景です。悪魔が解き放たれても、それでも主を選び取るのか？という問いかけがなされているのです。

「地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わす」とありますね。ゴグとマゴグについては、エゼキエル書 38 章の預言にあります。ここ、千年間の終わりの時に起こる出来事は、エゼキエル 38 章の成就だという意見があります。私はそうではないと思っています。なぜならば、そ

ここに書かれていることとエゼキエルの見た幻とは、似てはいますが違いも多いからです。同じだという人たちは、その似たところをもって同じだとしています。そしてエゼキエル書には、その戦いの後、40章以降に、神の神殿の幻があります。同じく黙示録21章から、天のエルサレムの姿があります。だから同じだというのです。けれども、私たちはエゼキエル書を学んだことがあります、その神殿と、黙示録21章のそれは明らかに異なる形状です。寸法も明確に書かれており、全く異なる幻であります。

ですから、預言の成就ではなく、ゴグとマゴグの戦いのような展開を千年王国の終わりに起こるということです。エゼキエル戦争の時期については、七年間の患難期の前に起こるという人もいますし、その半ばに起こるという人もいますし、またハルマゲドンの戦いと同じだという人たちもいます。いずれにしても、イスラエルがマゴグの地のゴグによって率えられる軍勢、ペルシアやベテトガルマ、ゴメル、クシュ、プトなども合わせて襲ってきます。それは、選ばれた民イスラエルが、その約束の地に安住している時にこれらを神は地震などによって滅ぼされ、その残骸を燃焼させるのに七年間かかるとあります。その後で、エルサレムに新しい神殿が建てられますが、これが千年王国の時にあります。これと同じパターン、あるいは展開で、千年期の終わりにも起こるということです。イスラエル民が安住していた時に、襲ってきたゴグとマゴグの戦いが、平和に暮らしている聖なる都の人々のところに、地の四方から諸国の民が襲ってくる、ということです。

<sup>9</sup> 彼らは地の広いところに行って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。

「地の広いところ」ということですが、終わりの日の神の都、エルサレムは、イエス様が再臨された時に、そこだけが高くなり、周りは低い平地とさせられることがゼカリヤ書に書かれています。「14:10 全土はゲバからエルサレムの南のリンモンまで、アラバのようになる。しかしエルサレムは高くそびえ、ベニヤミンの門から第一の門のところを経て隅の門まで、またハナンエルのやぐらから王家のぶどうの踏み場まで、元の場所にそのまま残る。」アラバとは、ヨルダン溪谷の一帯のことですが、海水面よりも低い地域です。とても低くなり、平地になります。けれども、エルサレムは高められます。

そして「聖徒たちの陣営」という言葉が興味深いです。陣営と言っても、武器を持っているわけではありません。かつてのイスラエルの民が荒野で宿営している時に、バラムが呪おうとしてもそれを神が祝福に変えられたように、霊的な防衛を聖徒たちは持っています。エルサレムは、主ご自身が炎の城壁を置いてくださる町となります。「2:4-5 彼に言った。「走って行って、あの若い者にこう告げよ。『エルサレムは、その中に人と家畜があふれ、城壁のない町ようになる。わたしが——【主】のことば——それを取り巻く火の城壁となる。わたしがそのただ中で栄光となる。』すばらしいですね、主は、私たち聖徒のために御使いも遣わして下さり、主ご自身が戦い、守ってください

ます。そして「愛された都」です。これもまた、ゼカリヤ書に色濃く、その神の御思いが書かれています。「1:14-15 わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。しかし、わたしは大いに怒る。安逸を貪っている国々に対して。わたしが少ししか怒らないでいると、彼らは欲するままに悪事を行った。」主は、エルサレムを妬むほど愛され、それゆえエルサレムに触れるものがあるならば、火をもって裁かれるのです。

ですからここで、「天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした」とあります。聖徒たちが戦ったのではなく、主ご自身がご自分の聖い火によって彼らを滅ぼされます。ところで興味深いのは、天から火が降って来たということは、主の御座のある天がまだ上にあるということです。21章以降、その天が地上に降りて来る、天のエルサレムの姿を見ます。そこには主の御座が、新しい都の中にある状態、天と地が一つにされた状態を見ます。

## 2B 投げ込まれる悪魔 10

<sup>10</sup> 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

ついに、悪魔が「火と硫黄の池に投げ込まれた」とあります。実は、彼がいるべきところとして神が造られたのが地獄です。マタイ 25 章 41 節に、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。」とあります。そこにはすでに、千年期の前に投げ入れられている獣と偽預言者がいます。「世々限りなく苦しみを受ける」のです。と言っています。しかも、昼も夜もと強調しているので、絶えずということです。休息はありません。

## 2A 大きな白い御座 11-15

そして、この悪魔とその使いのために用意された永遠の火に、残念なことに多くの人々が投げ入れられます。それは、その一人一人が、自らの意志で悪魔の惑わされるままにしていたからです。悪魔の偽りに追従したので、神は火の池に投げ込むことは意図されていないのに、自らその道を選びます。その結末が次の 11 節以降に書かれています。

## 1B 数々の書物 11-13

<sup>11</sup> また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

ついに、最後の審判です。「大きな白い御座」とありますが、偉大な、力ある、畏れ多いということです。それが「白い」とあります。これは、光り輝く方であられ、あまりにもその光が強いため、白くなっている状態です。「近づくこともできない光の中に住まわれ」とあります(1テモテ 6:16)。



聖書は、何度も何度も、私たちが神の御前に出て、申し開きをすることを教えています。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」そして、「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」私たちがしていること、行なっていることの全てが、神の御前に持って行かれるのだということでもあります。

そして、この時に今の天地が無くなります。千年王国における天地は、改まったものであって、刷新されたものです。「使徒 3:21 このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」万物の改まる時ということです。エデンの園のような状態に回復したとお話しました。これは、「改まった」ということで、古い天と地の秩序でありました。ところが主は、それらをも全く新しくされます。

次回の 21 章で新しい天、新しい地について見ていきますが、ペテロがこの全く新しくされる神の働きを、預言しています。「2ペテロ 3:10-12 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならぬことでしょう。そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」天の万象が崩れます。イエス様も、天と地は過ぎ去るけれども、わたしのことばは決して過ぎ去らないと言われました。

ヘブル書においても、ハガイの預言を取り上げてこう話しています。「ヘブル 12:26-27 あのときは御声が地を揺り動かしましたが、今は、こう約束しておられます。「もう一度、わたしは、地だけではなく天も揺り動かす。」この「もう一度」ということばは、揺り動かされないものが残るために、揺り動かされるもの、すなわち造られたものが取り除かれることを示しています。」この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。」聖書ははっきりと、今のものは過ぎ去り、けれども決して揺り動かされることのない御国が与えられることを教えています。そこにキリスト者の期待がかかっていなければいけません。

<sup>12</sup> また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

ここで「第二の復活」が書かれています。私たちはすでに、「第一の復活」についてみました。5-6

節にあります、「残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らなかった。これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める。」幸いな者、聖なる者と呼ばれていますね。第一の復活は幸いですが、第二の復活は災いです。神の法廷に出るための復活であり、判決を受け、そして刑罰として火の池に投げ込まれるための復活だからです。イエス様はダニエル 12 章の預言から、こう言われました。「ヨハネ 5:29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」ですから、永遠のいのちを受ける、報い、称賛を受けるというよみがえりがあり、裁きを受けるためのよみがえりがあります。

「大きい者も小さい者も御座の前に立っている」と言っていますが、これは立場によって裁きが変わるわけではないということです。神はえこひいきしない方です。全ての人が、どんな影響力があろうとも、主の前に出てこないといけないということです。

次に、「数々の書物が開かれた」とあります。主は、すべてのことを記録しておられる、すべてを覚えておられるということです。ダビデはこう言いました。「詩篇 139:16 あなたの目は胎児の私を見られあなたの書物にすべてが記されました。私のために作られた日々がしかもその一日もないうちに。」このように、たくさんの方のことを神は書物に書き記しておられます。

そして、「書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった」とあります。そうです、自分のしてきたこと、その行ないについての書物は数々あるけれども、その原則とは異なる「いのちの書」というものがあります。永遠のいのちを持っているかどうかの書物です。自分の名が、そこに記録されていれば永遠のいのちにあずかり、そうでなければ、他の書物にしたがって行ないに応じて裁かれます。モーセは、イスラエルが金の子牛を拝んで罪を犯したとき、こうやって主に執り成しを行ないました。「今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださいなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。(出エジプト 32:32)」これは、いのちの書物のことですね。イエス様が、悪霊を追い出して戻って来た弟子たちに対してもお語りになりました。「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

そして、黙示録には「いのちの書」が何度となく出てきました。「またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。(3:5)」イエス様がここで言われているように、いのちの書の基準はイエス様が、父なる神と御使いの前でその人の名を言い表してくださるのかどうか、というものです。マタイによる福音書には、父の前で言い表すとあり、ルカによる福音書には御使いたちの前で言い表すとあり、ここ黙示録 3 章 5 節は、どちらも書いてあります。どちらも、イエス様を自分は知っている人と人々の前

で言うものが、その神と御使いの前でイエス様を知っているという条件なのです。つまり、これは行ないの原理ではなく、知っているといういのちの原則なのです。

けれども、「死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。」と言っています。千年間、復活せずにいた死んだ人々は、実はすべて、いのちの書に書き記されておらず、他の書物によって、その行ないに応じてさばかれているのです。それは不当だ、なぜただ信じるだけで、行ないが伴わないのに救われるのか？良い行ないもしたのに、どうして裁かれるのか？という意見を持っている人もいます。これは、恵みの原理があるからです。つまり、すべての人が行ないに応じて裁かれるのです。いや、既に裁かれたのです。ところが、御子が罪のための供え物となったださり、身代わりに私たちの罪、咎を受けてくださった、そしてこの方に救っていただけよう、その御名を呼び求めた、ということでもあります。キリスト者も、裁かれました。キリストにあって裁かれました。キリストが身代わりに受けくださった裁きによって、すでにその御怒りはキリストにあって満たされたのです。だから、今、神の和解があります。それを受け取っているのか、受け取っていないのか、ということでもあります。

そのことを、ヘブル書の著者も述べています。究極の裁きとは何か？ということ。「10:29-31 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。私たちは、「復讐はわたしのもの、わたしが報復する。」また、「主は御民をさばかれる」と言われる方を知っています。」御子を踏みつけていること、契約の血、すなわち新しい契約の血であり、キリストが流された血です。そして恵みの御霊であります。すべての罪を、キリストの血潮で洗い清め、赦してくださり、拭い去ってくださるといふ血潮です。これを、軽んじる、侮る時に、神の怒りが留まるということです。

<sup>13</sup> 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

死者が海の中にいるように書かれています。そして、それが「よみ」とも言い換えられています。聖書において、死者が降る所です。また、地の中にあるともされています。民数記において、コラたちが陰府に下ったことが書かれています(民数 16:30)が、それは生きている時に地が割れて、地の中に落ちていったことを表しています。エゼキエル書には、エジプトなどが地の下に降りていく幻が書かれています。そして、ヨナ書においては海底の下にあるところとして書いています(ヨナ 2:2)。そして、ミカ書には罪を投げ入れるところとして、海を挙げています。「7:19 もう一度、私たちがあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ込んでください。」そしてイエス様が、小さき者をつまずかせるなら、海の深みに投げ入れられたほうがましであるということをお話しました(マタイ 18:6)。このように、地の中、あるいは海底やその下に、罪が投げ入れられ、また死者が降るというように書かれています。



しかし、神の約束に期待している人と、そうでない人の間には、そうした陰府においても異なる場所に入れられていることを、イエス様はラザロと金持ちの話でしておられます。ルカ 16 章 19 節以降ですね、アブラハムのふところと呼ばれる所にラザロは降りて行き、金持ちは、熱くて苦しい苦しみの中に入れられています。そして、その間には大きな淵があり、行き来できないとアブラハムが言っています(26 節)。そして、そのアブラハムに対する約束、キリストについての約束を信じていた聖徒たちは、イエス様が復活され、天に昇られる時に自分たちも引き連れて行かれることが、エペソ 4 章に書かれているのです。ですから、そこにいる人々はすべて、不信者ということになります。ゆえに海というのが、死とよみを葬っているようなところであると言えるのです。

## 2B 第二の死 14-15

<sup>14</sup> それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

死は、陰府ごと、火の池に投げ捨てられます。ですから、21 章において、新しい天と新しい地には死そのものがなくなることが書かれています。コリント第一 15 章にも、「最後の敵として滅ぼされるのは、死です。(16 節)」とあります。

そして「第二の死」とありますが、「第一の死」とは、肉体の死です。けれども、第二もあるのだということを強調しています。それは神の住まわれる都から外されている苦しみの中です。21 章にも出てきます。永遠の死と呼んだらよいでしょう、主の住まわれるところから永遠に離れたところに住むという苦しみの中です。肉体の死だけではなく、第二の死もあるのだということを知る必要があります。そして神は、キリストにあって、第二の死にあずからなくてもよいのだという救いも与えておられます。

<sup>15</sup> いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

「火の池」は、先に話しましたように、悪魔とその手下のために造られたところです。けれども、神を意図的に拒み、神は要らないのであれば、それにふさわしい、その自由意志を尊重するようところにその人を送らなければ、神のご性質に反します。神は、無理やり、強いて人を天に入れることはできないのです。自ら福音の真理を拒んだ人に対して、神は真理ではなく、悪魔の偽りを聞き、それに従うままにされるのです。「2テサロニケ 2:9-12 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」そして基準は再び、「いのちの書に記されていない」ということであります。自分の犯した罪について、その罪を神のところに持って行っていないということです。

イエス様が何度となく、ゲヘナについて警告しました。「マタ 5:30 もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。」「ルカ 12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」何を最も恐れなければいけないのかを、イエス様は教えられました。私たちはいろいろなことを恐れますが、本当に恐れなければいけないことを恐れる時に、恐れなくてよいものを恐れなくて済みます。神の愛は、その恐れをしめだします。